

共通の理解基盤を目指して

医師として、言われて最も困ってしまう言葉の一つに、「先生にお任せします」という言葉がある。信頼していただく有り難さを感じる一方、その人の人生を左右する重大な治療方針の選択であればあるほど、いくら主治医でもその選択を代行することはできないと感じるからだ。しかし、自分の知らない分野においては、そう言いたくなる気持ちもよく分かる。

医療における選択と言っても、風邪薬の剤型の選択から、がんの治療法や終末期の意思決定までさまざまである。「お任せします」という言葉の重みもさまざまだ。

私も車の整備などでいろいろ説明を受けても、よく分からず、何となく「それでお願います」と言ってしまうことがある。懇切丁寧に説明はしてもらっても、正直なところ判然としないことだってあるのだ。

医師による病状説明をかつて「ムンテラ」と言うことが多かった。ドイツ語で「口」と「治療を合わせた言葉と聞いている。良く言えば言葉による治療、悪く言えば一方的な病状の

宣告のように受け取られることが多かった。そこでだいぶ前から、これに代わって「インフォームド・コンセント」という言葉が用いられるようになった。

見創見 Tuesday

御本人と御家族に病状をただ伝えるだけではなく、起こりうることについてもしっかりと理解していただき、その上で治療方針への同意を得るという意味だ。とはいえ、病状をきちんと理解していただくことは、そう

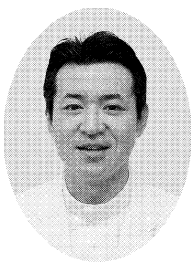
医療における選択

簡単ではない。

かつて大学で文章の書き方を指導された時、専門外の人でも分かるように書きなさい、と再三教えられた。高校を卒業した人に分かることを基準に書くよ

小倉 和也

はちのへファミリー
クリニック院長



おぐら・かずなり
1972年生まれ。2010年に国内でも珍しい家庭医療の医院を八戸市で開業。国際基督教大、琉球大医学部卒。八戸市出身。

うにと、技術を教えられた。

簡単なように思えるが、これがなかなか難しい。特に医学的な内容に関しては、どうしても専門用語が入ってくる。それを説明することから始めると無理が出てくるのだ。

ることを可能な限り理解した上で、重大な選択に寄り添うのも医師の務めである。それは、一度や二度の病状説明では到底伝えきれない内容を含んでいる。

特に在宅医療において、終末期のケアを行っていて感じるのは、治療過程全体が病状を受け入れるプロセスそのものであるということだ。例えばがんの宣告を受けても、それはあくまでも宣告であり、実際の意味を理解するには長い時間を必要とする。

どんなに理解力のある方であっても、その後起こる事柄と、それに伴う心境の変化を瞬時に全て理解することは不可能だ。徐々に変化する体調を通して、またその間の治療と、医師や医療スタッフとの対話を通して、身をもって病状を理解し、少しずつ受け入れていくことが可能になるのだ。

「看取り」という言葉が注目されているが、看取りも最期の瞬間だけを指すのではない。最初に患者本人や家族と会った瞬間から始まり、治療終了まで続く、一つのプロセスだと考えている。